地理学報告　第 121 号　65 ～ 70　2019

金沢市ひがし茶屋街の「お茶屋文化」と観光客の認識

宇野木麻友[1]・佐藤祐介[1]・田辺星登[1]・林　美月[1]・阿部亮吾[2]
（[1] 愛知教育大学・学，[2] 愛知教育大学）

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　ひがし茶屋街と「お茶屋文化」の提供
Ⅲ　「お茶屋文化」に対する観光客の認識
Ⅳ　おわりに

キーワード：お茶屋文化，観光客，ひがし茶屋街，金沢市

Ⅰ　はじめに

1．研究の背景と目的

金沢市は，2015 年 3 月に北陸新幹線が開通したことを機に観光客が急増し，大変な賑わいをみせている。なかでも，ひがし茶屋街を含む「3 つの茶屋街」（図 1）を訪れる観光客は，金沢城公園・兼六園に次いで多い[1)]。金沢市の「茶屋街」は，いずれも江戸～明治時代にかけて成立した遊廓に起源をもつ遊興の空間であり，また「一見さんお断り」のしきたりが今も息づく伝統芸能文化（金沢芸妓とお茶屋文化）の空間でもある[2)]。

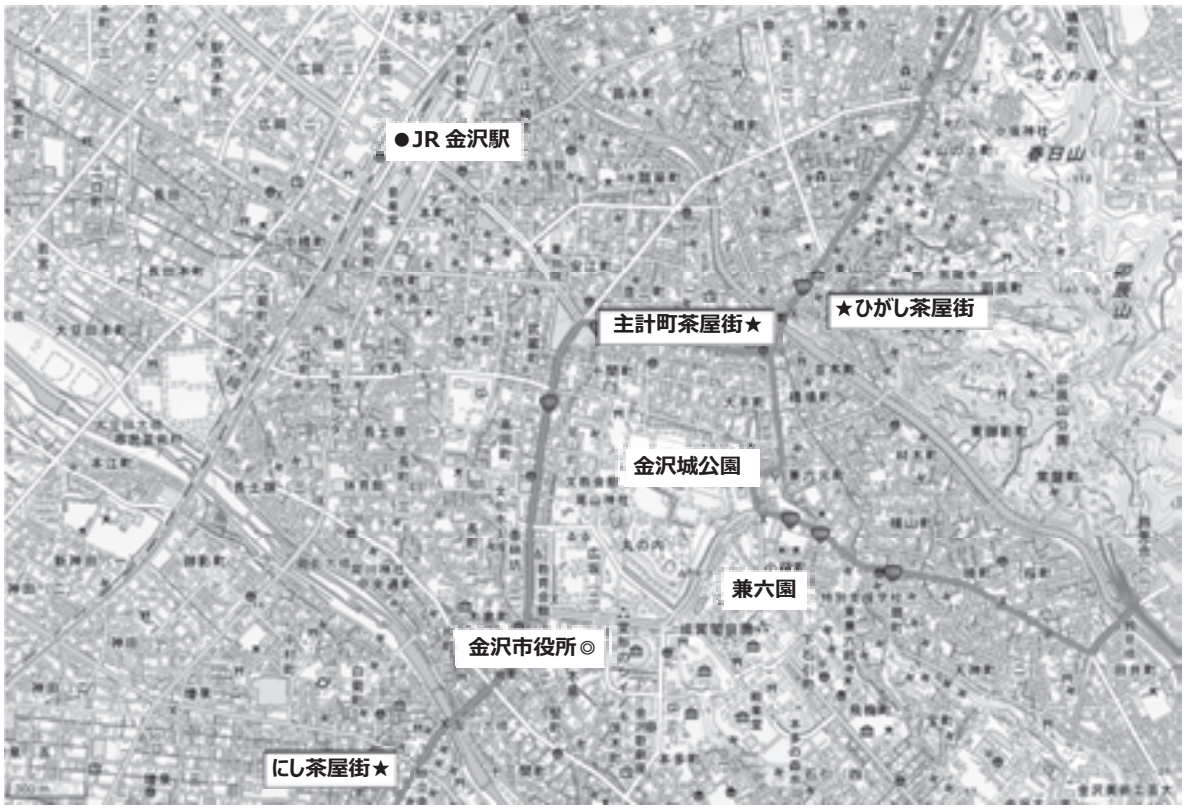

図 1　対象地域の概観
（地理院地図より作成）

しかしながら，特にひがし茶屋街（写真 1）を訪れる観光客の多くは，着物を着て散策したり，茶屋街の建物を活用したおしゃれなカフェのスイーツを求めてやってきては，その歴史的町並みと自身の姿を写真に収めることはあっても[3]，茶屋街における「お茶屋」の存在や「茶屋遊び」に触れる機会はあまりない。茶屋街を構成する「お茶屋」とは，お茶を飲む喫茶店ではなく，宴席の場に芸妓を呼んで芸を観覧しながら客が飲食に興じる店のことである。芸妓の所属するお茶屋に上がるのにかかる費用は，数万から数 10 万円といわれている。

このように，同一空間のなかに来訪者の殺到する昼の観光空間と，今も生きる一見さんお断りの夜の芸能空間が混在するところに，金沢市における茶屋街の興味深い点がある。そこで私たちは，観光化が進むこのひがし茶屋街において，お茶屋文化を提供する主体の意識と，その受け手側としての観光客のもつお茶屋文化に対する認識とのあいだにある齟齬を明らかにしたい。それを通じて，ひがし茶屋街における観光化とお茶屋文化の維持・発展との共存について考える。

2．先行研究と問題の所在

黒川（2000）は，従前の町並みを大胆に改変して誕生したひがし茶屋街の景観的眺望を，劇場空間にたとえている。佐藤（2007）によれば，にし茶屋街に比べてこうした歴史的町並みが「面的」に残っている点も，ひがし茶屋街が観光客を誘引する大きな魅力になっているという。ただし，小林ほか（2002）も指摘するように，観光客の来訪や観光化に対するポジティブな感情は，ひがし茶屋街よりもむしろにし茶屋街において強く表れているのは興味深い。過度な観光化に対して，ひがし茶屋街の地域住民が不安を抱いていることの証左であろう。ひがし茶屋街の「伝統的建造物群保存地区」（伝健地区）への指定が遅れたことも，こうした地域住民の不安感に起因している（石原 2014）。ひがし茶屋街が「東山ひがし」地区として伝健地区になったのは 2001 年 5 月のことである[4]。

写真 1　観光客であふれるひがし茶屋街の様子
（2019 年 3 月 18 日，阿部亮吾氏撮影）

他方，金沢芸妓の人材育成の仕組みに焦点を当てた研究もある。西尾（2011）は，サービス・プロフェッショナルとしての金沢芸妓には，経営者や女性従業員のあいだで疑似家族関係が構築されており，そのことが芸妓の人材育成に重要な機能を果たしていること，おもてなしサービスの内容をよく理解して対価を支払う良質な顧客がそうした関係性の延長上に組み込まれていることを示唆した。

以上のように，ひがし茶屋街の景観的特徴や地域住民の意識に関する研究はすでに存在する。しかしながら，ひがし茶屋街に来訪する観光客のもつお茶屋文化への認識に焦点を当てた研究は管見の限りみられない。そこに本研究の意義がある。

Ⅱ　ひがし茶屋街と「お茶屋文化」の提供

1．ひがし茶屋街の形成史

加賀藩のもと，生活困窮者を救う政策の一環で遊郭施設の設置が進められたのは，1820（文政 3）年のことである。にし茶屋街とともに加賀藩による茶屋営業の許可がおり，藩公認の遊廓として成立した後も，本来立ち入りを禁止されている武士が茶屋街に出入りするようになったり，遊女が市中を出歩くことで風俗が乱れたため，11 年後の 1831（天保 2）年に茶屋街はいったん廃止となった（佐藤 2007）。

幕末期の 1867（慶応 3）年に茶屋営業が再開され，第一次世界大戦後には好景気を迎えたものの，第二次世界大戦後の 1958 年に施行された「売春防止法」によって，ひがし茶屋街では 48 軒のお茶屋が廃業し現在に至っている[5]。

『金沢市東山ひがし伝統的建造物群保存地区保存計画』（2001 年 5 月 1 日，教育委員会告示第 4 号）によると，現在のひがし茶屋街は南北約 130m，東西約 180m，面積約 1.8ha であり，伝健地区内の建築物 144 戸のうち約 6 割が伝統的な茶屋建築であるという。茶屋街創設時から明治初期にかけて建築された茶屋様式の町家が多く残っているため，ここは金沢市の重要な観光スポットになっている。また，ひがし茶屋街では，2019 年 3 月時点で芸妓を抱える店舗が 6 店舗，16 人の芸妓が所属している[6]。

2．お茶屋の取り組み

お茶屋の認知度向上や，一般庶民には縁遠いものとされてきたお茶屋遊びを身近な伝統芸能に感じてもらうために，現在さまざまな取り組みが行われている。たとえば，茶屋建築の 1 つである「志摩」や「懐華樓」（写真 2）では昔さながらに保存された茶屋建築の内部を見学できたり，石川県立音楽では芸妓による踊りやお座敷太鼓等を鑑賞することもできる。また，5,000 円程度でお座敷遊びを体験できる「金沢芸妓のほんものの芸にふれる旅」という体験活動もある[7)]。こうした取り組みは，近年増加する訪日外国人に対する日本文化の発信の側面も有している。

本研究では，お茶屋文化と金沢芸妓の伝統芸能を保存・発信する金沢伝統芸能振興協同組合（2019 年 3 月 19 日（火））ならびに懐華樓（2019 年 3 月 20 日（水））に対して，お茶屋文化の現状と保存・継承・発展に関する聞き取り調査を実施した。

1）金沢伝統芸能振興協同組合の取り組み

金沢商工会議所内に事務所をおく金沢伝統芸能振興協同組合（以下，組合）は，当時社会的地位の高くなかった金沢芸妓やお茶屋文化を守り，継承・発展させる目的で 1983 年に設立された組織である。現在は，3 つの茶屋街のお茶屋をとりまとめる存在となっている。

写真 2 「志摩」（上段）と「懐華樓」（下段）の景観
（2019 年 2 月 21 日，阿部亮吾氏撮影）

組合への聞き取り調査によれば，組合は観光のためではなくお茶屋文化の保存に重きをおいて活動しているという。「一見さんお断り」が今も徹底されているのも，各お茶屋が芸能文化の維持を重要視するためである。ただし，このことが担い手不足と新規顧客，特に地元顧客獲得の困難さにもつながっている。

北陸新幹線の金沢開通をきっかけに，お茶屋文化に対する行政補助はかなり増加した。もっとも，観光客が増加したことによりひがし茶屋街での消費単価は伸びたものの，お座敷遊びを目的にした人が増加したわけではない。一方で，東京のメディアに特集されるようになったことで，全国から芸妓になりたいという人が集まるようになったのも事実である。

行政は金沢芸妓を観光手段として，また企業はまちづくりの観点としてみているが，お茶屋文化の保存・継承・発展を主目的とする組合は，お金さえ払えばお座敷遊びを楽しめるという単純な意識にしたくないため，今後も料金の公表はしない予定である。こうしたことが信用・粋の文化にもつながっていくという考えである。外国人観光客は 2016 年度以降増加しており，かれらのニーズの把握も行なっているが，伝統芸能文化を守るということを最優先させている以上，全ての観光客のニーズを満たすことは難しいという。

2）懐華樓の取り組み

「志ま屋」として創業した懐華樓は，1949 年までは「越濵」という名でお茶屋営業をしていた。その後空き家になっていたが，お茶屋文化を支援する目的で買い取られ，1993 年から「懐華樓」としての営業が始まった。昼間は懐華樓内の施設見学やカフェとして利用でき、夜間には「艶遊会」や「Geisha Evenings in Kanazawa」[8)]も開催されている。艶遊会は「一見さん」であってもお座敷遊びを楽しめるイベントであり，Geisha Evenings は外国人観光客向けのイベントである。

懐華樓への聞き取り調査によれば，こうした取り組みの根底には金沢独自の芸妓文化を味わってほしいとの考えがあるものの，茶屋街内に看板を立てることができないなどの制約もあって，イベントの集客は大変であるという。懐華樓にとって観光化によるデメリットは特になく，「Geisha Evenings」参加後に「艶遊会」にも参加した外国人観光客がいたように，金沢芸能文

化の広がりが感じられる。一方で，観光化だけでなく，お茶屋文化を守ることとその認知度向上を同時に達成していくことの重要性が，聞き取り調査においても強調されていた。

以上，組合はお茶屋文化の保存・継承を重視し，懐華樓はそれを観光資源として活用しながら発展させていく取り組みを行っていることがわかった。いずれも，お茶屋文化が消えゆくことへの危機感を共有しており，観光化による展開と伝統芸能文化の保存を両立させていくことが，ひがし茶屋街の課題となっている。

Ⅲ　「お茶屋文化」に対する観光客の認識

それでは，ひがし茶屋街に来訪する一般の観光客は，こうしたお茶屋やお茶屋文化に対していかなる認識をいだいているのだろうか。本研究では，2019 年 3 月 19 日（火）～ 20 日（水）にひがし茶屋街内で観光客に対する対面式アンケート調査を行った（写真 3）。調査対象者に訪日外国人観光客も含めるため，調査票は日本語版に加えて英語版と中国語版も用意した。その結果，日本人（石川県内在住者）20 人，日本人（県外）130 人，外国人 97 人の計 247 人分の回答が得られた（表 1）。なお，外国人観光客の大半は欧米（南米，豪州含む）諸国出身者である。

性別をみると，県外からの観光客で女性の割合が 67.7% と突出するが，その他はほぼ同数となった。年齢層は，いずれも 10 ～ 30 代のいわゆる若年層が 6 割以上を占めていることから，本アンケート調査の結果は比較的若い世代で，かつ（県外の日本人を除いて）男女の意見は均等に反映されていることがわかる。

1．来訪目的

まず，観光客の来訪目的からみてみたい（表 2）。全体でみると，もっとも多く得られた回答は「散歩・散策」（197 人，79.8%）であった。観光客の主来訪目的は，ひがし茶屋街をぶらつくことにある。これに「食事・喫茶」（85 人，34.4 %）や「買い物」（64 人，25.9%）が加わるが，「お茶屋施設の見学」は少なく，「芸妓うちわづくり体験」に至っては皆無であった。

日本人と外国人とでこの傾向にあまり差はみられないが，石川県内在住の日本人は「散歩・散策」よりも「食事・喫茶」を重視する一方，県外日本人の場合，「お茶屋施設の見学」を来訪目的とした 17 人（13.1%）も，「散歩・散策」や「食事・喫茶」とともに回答した人が多数を占めることから，全般的にはお茶屋に対する興味は薄い。他方で外国人は，日本人よりも「食事・喫茶」への関心が低くて「お茶屋施設の見学」や「金

写真 3　ひがし茶屋街でのアンケート調査の様子
（2019 年 3 月 20 日，阿部亮吾氏撮影）

表 1　回答者の基本属性

			人	%	10～30代	40～50代	60代以上
日本人	（石川県内）	男性	11	55.0	12	5	3
	計20人	女性	9	45.0	60.0	25.0	15.0
	（県外）	男性	41	31.5	81	21	27
	計130人	女性	88	67.7	62.3	16.2	20.8
外国人		男性	49	50.5	63	17	17
	計97人	女性	47	48.5	64.9	17.5	17.5

（アンケート調査より作成）

表 2　ひがし茶屋街への来訪目的（複数回答可）

			散歩・散策	食事・喫茶	買い物	お茶屋施設の見学	金箔工芸の体験活動	着物着用体験	芸妓うちわづくり体験	お抹茶体験
日本人	石川県内	人	8	10	3	1	–	–	–	–
	n=20	(%)	40.0	50.0	15.0	5.0	–	–	–	–
	県外	人	104	58	37	17	4	5	–	1
	n=130	(%)	80.0	44.6	28.5	13.1	3.1	3.8	–	0.8
外国人		人	85	17	24	20	16	–	–	7
	n=97	(%)	87.6	17.5	24.7	20.6	16.5	–	–	7.2
計		人	197	85	64	38	20	5	–	8
	n=247	(%)	79.8	34.4	25.9	15.4	8.1	2.0	–	3.2

（アンケート調査より作成）

箔工芸の体験活動」にやや関心を示していることから，日本人よりは伝統文化を好む傾向が読み取れた。

2. お茶屋とお茶屋文化に対する認知度と評価

次に，お茶屋ならびにお茶屋文化に対する認知度を分析する（表 3）。結論からいえば，観光客からもっとも多く得られた回答は「わからない」（127 人，51.4%）であった。特に，外国人観光客においてその特徴が顕著である。日本人（石川県内）は比較的認知度が高めではあるものの，日本人（県外）でさえ「3つの茶屋街がある」ことやお茶屋が芸妓のいる「社交場」であること以外，金沢芸妓の歴史や文化に対してさほどの認知があるわけではない。すなわち，いずれの観光客もお茶屋やお茶屋文化そのものに対してある程度の造詣をもって来訪しているのではなく，ひがし茶屋街という名称と，古い町並みの整備された観光地を訪れているにすぎないことが示唆された。

最後に，「将来的にお茶屋を利用したいかどうか」も尋ねた（表 4）。約半数の人があげたのが「時間があれば行ってみたい」（131 人，53.0%）であった。次に「費用が安ければ行ってみたい」（100 人，40.5%）がきている点をふまえると，時間と費用のコスト面がポイントであるように示唆された。ただし，「時間」の余裕を最重要視しているのは旅程に限りのある県外と海外の観光客であり，石川県内在住者はコスト面よりも「一見さんお断り」を障壁として認識しているようである。これは，金沢周辺に住んでいることで時間の制約が少ない一方，「一見さんお断り」のしきたりを耳目にしているため，お茶屋の敷居を高く感じているせいであろう。また，来日機会がめったにない外国人観光客は，日本人ほど「費用」を気にかけていない様子も読み取れる。したがって，外国人にお茶屋文化を体験してもらう場合の費用的制約はさほど大きくないと考えてもよい。あるのは時間的制約のみである。お茶屋遊びの開催時間帯を考慮したり，時間を短縮して体験をコンパクトにパッケージツアー化することで，外国人観光客にもお茶屋文化を展開できる可能性が示唆された。

Ⅳ　おわりに

本研究では，ひがし茶屋街において伝統芸能文化を提供する主体と，その受け手側である観光客の認識とのあいだにある齟齬を明らかにすることを目的とした。その結果，お茶屋や金沢伝統芸能振興協同組合は，お茶屋文化の観光化にデメリットこそ感じていないもの

表 3　お茶屋ならびにお茶屋文化に対する認知度（複数回答可）

			金沢には，全部で3つの茶屋街がある	金沢のお茶屋とは，芸妓さんと「お座敷遊び」などをする社交場のことである	金沢芸妓には，およそ200年の歴史がある	金沢芸妓の芸能には，踊り，お囃子，三味線・歌などの多様な種類がある	金沢のお茶屋には，「一見さんお断り」のしきたりがある	ひがし茶屋街には，今でも6軒のお茶屋が営業している	ひがし茶屋街のお茶屋建築のうち，志摩や懐華樓は内部の見学が可能である	ひがし茶屋街のお茶屋では，「お座敷遊び体験」などが開かれている	わからない
日本人	石川県内	人	7	6	3	7	6	2	1	4	8
	n=20	(%)	35.0	30.0	15.0	35.0	30.0	10.0	5.0	20.0	40.0
	県外	人	38	38	13	22	21	6	13	18	63
	n=130	(%)	29.2	29.2	10.0	16.9	16.2	4.6	10.0	13.8	48.5
外国人		人	7	14	16	20	−	6	10	3	56
	n=97	(%)	7.2	14.4	16.5	20.6	−	6.2	10.3	3.1	57.7
計		人	52	58	32	49	27	14	24	25	127
	n=247	(%)	21.1	23.5	13.0	19.8	10.9	5.7	9.7	10.1	51.4

表 4　将来的にお茶屋を利用したいかどうか（複数回答可）

			「一見さんお断り」でなければ行ってみたい	費用が安ければ行ってみたい	時間があれば行ってみたい	体験ツアーがあれば行ってみたい	行ってみたいとは思わない
日本人	石川県内	人	8	6	7	5	2
	n=20	(%)	40.0	30.0	35.0	25.0	10.0
	県外	人	39	67	69	24	9
	n=130	(%)	30.0	51.5	53.1	18.5	6.9
外国人		人	19	27	55	17	9
	n=97	(%)	19.6	27.8	56.7	17.5	9.3
計		人	66	100	131	46	20
	n=247	(%)	26.7	40.5	53.0	18.6	8.1

（アンケート調査より作成）

の，第一に考えているのは伝統芸能文化の保存と継承であることがわかった。そのため，観光客のニーズ全てに応えることは難しく，できる範囲内での提供にとどまっている。少しでも多くの人にお茶屋やお茶屋文化の正しい認識が広がり，その伝統芸能に惹かれる人が現れることを心から願っているようである。

一方，ひがし茶屋街を訪れる観光客は日本人・外国人ともに，お茶屋やお茶屋文化自体に触れることよりも，歴史的町並みを味わうことを主目的とする。とりわけ金沢芸妓やお座敷遊び等のお茶屋文化に関しては認知度が低く，積極的に知ろうとする傾向はあまりみられなかった。ただし，今後もお茶屋を利用する可能性がない人は1割にも満たず，「時間」と「費用」のコスト面がクリアされればお茶屋に行ってみたいと考えている。そこにお茶屋が発信するイベントなどがうまく噛み合えば，お茶屋文化のさらなる広がりもありえるのではないかと結論づけたい。

しかしながら，本研究のアンケート調査では年齢層が若年層に，また外国人の出身地が欧米諸国に偏ってしまったため，観光客の認識を十分に調査することができなかった。継続的な研究が待たれる。

謝　辞

本研究にあたって，お忙しいところ金沢伝統芸能振興協同組合ならびに懐華樓の皆様には聞き取り調査にご協力いただいた。また，観光中にも関わらず観光客の方々には快くアンケート調査にご協力いただいた。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

注

1）金沢市経済局営業戦略部観光政策課（2018）『金沢市観光調査結果報告書　平成29年（2017）』（https://www4.city.kanazawa.lg.jp/data/open/cnt/3/14897/6/kankou-chosa2017.pdf）（最終閲覧日：2019年8月25日）を参照。

2）金沢芸妓ホームページ（http://kanazawageigi.jp/）（最終閲覧日：2019年8月28日）を参照。

3）金沢旅物語（金沢市観光公式サイト）ホームページ（https://www.kanazawa-kankoukyoukai.or.jp/）（最終閲覧日：2019年8月28日）でも，ひがし茶屋街を「フォトジェニックな風景が撮影できる場所」として紹介している。

4）その後，東山ひがし地区は2001年11月14日に「重要伝統的建造物群保存地区」（重伝建地区）に指定された。また，浅野川を挟んだ対岸に位置する主計町地区も，2008年に重伝建地区となっている。一方で、にし茶屋街は伝建地区指定を受けていない。金沢市公式ホームページの「伝統的建造物群保存地区」（https://www4.city.kanazawa.lg.jp/11107/rekisimatizukuri/jyuudenkentiku2.html）（最終閲覧日：2019年8月31日）を参照。

5）佐藤（2007）は，にし茶屋街では85軒と，ひがし茶屋街の48軒に比べて多くのお茶屋が売春防止法で廃業した点に言及している。このことは，にし茶屋街の方が（芸妓ではなく）娼妓を多く雇用していたことを意味しており，売春防止法によるダメージも大きかったことを推察できる。

6）金沢芸妓ホームページ（http://kanazawageigi.jp/）（最終閲覧日：2019年3月20日）を参照。

7）前掲3）の特集「お座敷遊び体験 金沢芸妓のほんものの芸にふれる旅」（https://www.kanazawa-kankoukyoukai.or.jp/article/detail_26.html）（最終閲覧日:2019年9月5日）を参照。

8）Geisha Evenings in Kanazawaホームページ（http://geishaevenings.jp/）（最終閲覧日:2019年3月20日）を参照。

文　献

石原多賀子 2014. 都市づくりにおける「金沢の個性」と「創造」ー「金沢世界都市構想」具現化における事例を中心にー. 日本都市社会学会年報 32：7-23.

黒川威人 2000. 劇場空間としての金沢「ひがし」茶屋街. デザイン学研究特集号 8-1：16-21.

小林史彦・川上光彦・倉根明徳・西澤暢茂 2002. 金沢市三茶屋街における居住世帯の特徴と町並み・住環境・観光に対する意識の関係. 都市計画論文集 37：955-960.

佐藤有良 2007. 東・西茶屋街の歴史的経過と観光客誘引の差についての考察. 金沢星稜大学論集 41-2：37-45.

西尾久美子 2011. おもてなし産業における若手人材育成に関する地域比較研究ー京都・東京・金沢の芸舞妓の育成事例ー. 現代社会研究科論集 5：43-61.